

万吉だより

MA

GECHI

NEWS

第2号 平成15(2003)年12月

開館2年目に思う

館長 坂 浩 秀 一

立正大学博物館が開館して2年目を迎えました。この1年間は、まさに暗中模索の日々でした。大学博物館は如何にあるべきか、なかでも本学の場合どのように対処したらよいのか、他大学の博物館の活動を学び、そして現代における博物館のあり方を考え、本学の博物館の進むべき道を摸索してきました。

そのような熟慮の末、企画展と特別展を開催する方向が定まりました。企画展は、館活動の支柱として所蔵資料の活用と公開を今後どのように位置づけていくのか、一つの実験的な試みとして企画しました。第1回の企画展として考えたのは、退色したカラー写真を現在の技術で昔日の色調に甦らせることによって、貴重な資料を再活用する方途を探ることでした。その資料は、20年以前に岩井隆次氏が文学部考古学研究室に寄贈して下さいました日本の心礎カラーライド321枚でした。20年の歳月を経たライドは撮影時のカラーが大きく退色し、あたかもモノクロライドのごとき感を呈していました。博物館の開館にあたり考古学研究室から移管されたこの資料を対象に選び「写真でみる日本古代木造塔の心礎－岩井隆次氏寄贈写真による－」を開催した次第です。退色カラーは、パソコンの威力によって見事に甦りました。この企ては多数の来観者によって好評を博しました。ただ、この会期中、岩井氏が来館を予定されながら急逝されたことは痛恨事でした。98歳の氏に代りご子息が来館されビデオを生前にご覧に入れたことは幸いでした。特別展は、本学の研究成果をヴィジュアルに紹介することを主眼にしました。大学の研究成果は、とかく情報発信が不十分です。立正大学でどのような研究がなされてきたのか、また、現在どんな研究が実施されているのか、それらの情報をビジュアルに展観することは、開かれた大学のイメージとして有効でありましょう。第1回の特別展は、熊谷キャンパスの所在地－埼玉県を事例とした調査と研究の成果をテーマとし「立正大学が発掘した埼玉の古代窯跡」を開催しました。埼玉県の古代窯跡発掘は、昭和32年から45年にかけて科学研究費(文部省)の交付をうけ考古学研究室が実施した事例です。関連事業としてパネルディスカッションを開催し、現在の意義づけを果たすことにしました。この特別展のもち方は、今後における館活動の目玉の一つとしたい、と願っています。

企画展と特別展の開催により、学外から多数の参観者がありました。開かれた大学を標榜する本学として喜ばしいことであったと思います。あわせて学内の皆さん方が本館の存在をより深く認識して下さる展示であったのではないのでしょうか。

『立正大学博物館年報』1(平成14年度)には、開館1年間の情報を掲載しましたが、同時に『館蔵資料「基礎文献」叢刊』1輯(久保常晴氏収集寄贈樺太考古資料)を刊行しました。後者は貴重な資料を本学に寄贈された方の関連研究論文を収録し、展覧資料の活用をより有意義に果して頂くことを願って編集したものです。かくて2年目が過ぎました。ご協力を下さった学内外の沢山の皆様方に改めて感謝申し上げます。

NEWS

平成15年度 第1回博物館運営委員会

日 時 4月4日(金)
午後3:00~午後4:05
会 場 熊谷キャンパス 第2会議室
出席委員

坂詰秀一・清水千尋・千歳壽一・竹内 誠・
野沢佳美・島津 弘・上野恵司・田村佳道(事務局
嘱託)

本日の出席者は7名、欠席者2名の報告があり、
博物館規定第10条の2項により成立。

平成15年度 第2回博物館運営委員会

日 時 12月8日(月)
午後12:30~午後1:50
会 場 博物館内会議室
出席委員

坂詰秀一・清水千尋・田口正己・佐美光彦・
千歳壽一・島津 弘・上野恵司・田村佳道(事務局
嘱託)

本日の出席者は7名、欠席者2名の報告があり、
博物館規定第10条の2項により成立。

第1回企画展

7月7日(月)~8月4日(月)

写真でみる「日本古代木造塔の心礎」
-岩井隆次氏寄贈写真による-

第1回特別展

10月16日(木)~11月15日(土)

立正大学が発掘した「埼玉の古代窯跡」

記念講演会

日 時 10月18日(土)
午後1:30~午後3:30

会 場 立正大学熊谷校舎 1号館1102教室
演 題

- ①「立正大学が発掘した埼玉の古代窯跡」
坂詰秀一(立正大学博物館長)
- ②「埼玉県における立正大学古代窯跡調査の意味」
柳田敏司(埼玉県文化財保護審議会会長)

パネルディスカッション

「埼玉県における古代窯跡調査の回顧と現状」
柳田敏司・渡辺 一(鳩山町教育委員会)・坂詰秀一



パネルディスカッションの光景

職員の動向

5月15日(木)

平成15年度 埼玉県博物館連絡協議会

会 場:埼玉県立博物館 出席者:田村

6月19日(木)・20日(金)

平成15年度 全国大学博物館学講座協議会全国
大会

会 場:金沢学院大学 出席者:上野

8月31日(日)~9月8日(月)

博物館視察・韓国 出張者:上野

10月24日(金)・25日(土)

平成15年度 全国大学博物館学講座協議会東日
本部会

会 場:日本女子大学 出席者:上野

11月6日(木)・7日(金)

第51回 全国博物館大会

会 場:大阪府立青少年会館 出席者:上野

博物館実習の実施

8月5日(火)~8月11日(月)

午前10:00~午後4:00 参加者 23名

来館者数

4月1日(火)~12月24日(水)

来館者数 2,293名(実習生を除く)

一般・学生来館者

4月 254名 5月 202名 6月 301名

7月 504名 8月 22名 9月 312名

10月 126名 11月 442名 12月 130名

(オープンキャンパス7月31日(木)・9月20日(土)・

11月3日(月)の来館人数を含む)

来館者往来

〔高等学校〕

茨城県古河第三高校・群馬県桐生南高校・同伊勢崎東高校・埼玉県大宮武蔵野高校・同行田進修高校・同本庄第一高校・伊奈学園高校・本学付属立正高校 (計8校)

〔団体〕

嵐山町歴史資料館・長野県考古学会・米国サンメイン大学交換留学生・埼玉考古学会・日本機関紙協会埼玉本部・埼玉県北部創造センター・五所川原市教育委員会・彩の国いきが大学熊谷学園・橘父兄会地方懇談会 (計9団体)

出版物

立正大学博物館では、平成14年下半年～15年上半年にかけて、下記の刊行物を発刊しました。

・『立正大学博物館年報』創刊号 (平成15年3月刊)

・『館蔵資料「基礎文献」叢刊』第1冊 (平成15年3月刊)

・第1回企画展目録

『写真でみる「日本古代木造塔の心礎」

—岩井隆次氏寄贈写真による— (平成15年7月刊)

・第1回特別展展示図録

『立正大学が発掘した「埼玉の古代窯跡」』

(平成15年10月刊)

掲載紙・放送等

第1回企画展の紹介

7月25日 (金) 『埼玉新聞』 (地域県北)

ティラウラコット遺跡出土資料放映

2003年9月14日 (日) TBS世界遺産

「仏陀の生誕地—ルンビニー (ネパール)」

博物館見学

10月 『情報』第24号 埼玉考古学会

博物館視察報告

韓国を古鐘を訪ねて

上野 恵司

平成15年8月31日から9月9日まで、仏教考古学研究奨励基金委員会 (坂詰秀一委員長) から、梵鐘の比較研究と博物館視察を兼ね、韓国へ派遣していただいた。

韓国では、最初にソウルの国立中央博物館に向かった。かつては朝鮮総督府を利用した博物館であったが、現在は取り壊され移転中であり、資料は隣接して建築されていた建物の中に展示してあった。その中心は三国時代のものであったが、一隅に、高麗時代を中心とする朝鮮鐘が展示してあり見学した。

その後、北朝鮮との国境に近い五台山国立公園内の上院寺に行き、現在韓国内で最も古い新羅聖徳王24(725)年の銘を有する鐘を見学した。また、移動のため向かった江陵では、市立博物館を見学したが、その際、ボランティアで日本語を話す老人の方に丁寧な説明を受けた。

その後、扶餘と公州の国立博物館に向かった。公州の博物館は、武寧王陵関係が中心であり、現在その古墳のそばに新しい博物館が建設中であった。また、扶餘は当時百済の都であり、瓦など日本と関係が深い資料を見学した。

慶州に向かう途中、大邱の国立博物館に立ち寄った。この博物館は、展示施設以外にも体験学習室が完備されており、新しい試みの国立博物館であった。また、ここから大蔵経で著名な海印寺に向かい、聖寶博物館で大寂光殿鐘などを見学した。

慶州の国立博物館では、本学大学院の博士後期課程で共に学んだ朴洪國博士 (現在威徳大學博物館教授) が待っていて下さり、博物館にある著名な聖徳大王神鐘 (別名エミレの鐘) などを含む朝鮮鐘について、詳しく説明を受けた。また、かつて日本の学者が発掘した、周辺の古墳や寺院跡などについてご案内していただいた。

朴先生には、釜山に向かう途中の通度寺まで、ご一緒していただいた。ここは寺院では韓国最大級の博物館を有しており、館長・学芸員の方を紹介していただいた。博物館では、10月から梵鐘の特別展を開催するというので、朴先生のご尽力もあり、その資料についても説明も受けた。

最後に、付近の梵魚寺を見学し、平成14年5月に新しくなった釜山の市立博物館と東三洞貝塚資料館を見学し帰国した。

(本館専門職員・文学部特任講師)

博物館見学記

立正大学博物館の見学

塩野 博



6月1日(日)は、早朝から大雨にみまわれた。今日は、立正大学熊谷キャンパスをお借りして埼玉考古学会の15年度総会と、立正大学博物館を見学することになっていたの

である。埼玉県考古学会では、ここ数年来、県内各地の博物館や資料館、あるいは史跡整備を行っている市町村において会合を開き、あわせて見学会を開催してきている。今回もその一環として立正大学の好意により、総会と博物館の見学となったのである。

熊谷駅南口に出たところ、雨は小ぶりとなり、ちょうど停まっていた立正大学行きのバスに乗り込むことができた。バスの運転手と1人の学生、そして私の3人、乗ること10分、雨にうたれ、一段と濃い緑になった木々に囲まれたキャンパスに到着する。実に交通の便がよい。かつて、私は、このキャンパスのある「万吉」地域の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行ったことがあるが、その時は交通不便地であったと記憶している。もちろん分布調査であるので、もっぱら歩いて歩いてのことであったが。

総会は、議事すべてスムーズに行われ、予定時間より早く博物館の見学が行われることとなり、参加者全員が博物館に移動した。博物館では、我々の見学のために朝早くから、パンフレットなど準備されたようで、本当に感謝の意を表したい。

まず、雨上がりの玄関前にて、上野恵司氏(博物館専門職員・文学部特任講師)から博物館の建設経緯および展示資料の概要について説明をうかがい、記念の集合写真を撮影したのち、各自が自由に第1展示室・第2展示室を、見学することとなった。

博物館は、立正大学創立130周年にあたり、大崎キャンパスの考古学資料室と熊谷キャンパスの

考古学陳列室をもとに開設されたものであるという。したがって、長い歴史を経て収集された資料は、考古学資料をはじめ学術全般にわたっているが、その膨大な資料を、ここで公開(当面考古資料中心)して行くとのことである。

さて、この博物館には、立正大学がネパール王国で10年間発掘したティラウラコット遺跡(釈迦出家の故城カピラ城比定遺跡)の資料が展示されている。この仏教の原点を探求し、その波及を求める学術発掘は、立正大学の陣容ではじめて可能になったものであり、その発掘調査報告書はもとより、出土遺物が展示されていることは、ここを利用する学生をはじめ、多くの考古学者や仏教関係者にとって益することが大であろうと思う。

さらに、国内の考古資料としては、古代窯業遺跡の発掘資料が豊富に展示されていることである。埼玉県内の資料は、新久窯跡・八坂前窯跡・新沼窯跡・虫草山窯跡・亀ノ原窯跡など、埼玉県の代表的な窯業遺跡の須恵器や瓦・硯が整理されて数多く展示してあり参考になる。

また、博物館近隣の遺跡では、熊谷キャンパス内出土の旧石器資料と縄文時代早期の土器と石器が展示されている。そして、「踊る埴輪」の出土で著名な江南町野原古墳群の資料である。この古墳群の調査は、立正大学考古学研究室が昭和39年に8基の古墳を調査したものである。その概要は、昭和40年の日本考古学協会第31回総会・研究発表で報告されているが、遺物が公開されていること



埼玉考古学会

でその内容が豊かになり、あわせて大学キャンパスにある博物館と地元との関わりを一層濃くしている。

さらに、博物館を引き立てているのが、吉田格コレクションと、撫石庵コレクションである。吉田格コレクションの中でもとくに、吉田氏が設定した縄文時代早期の花輪台式土器や後期の称名寺式土器があり、型式標準資料を閲覧できる機会がもてたことは、私をはじめ、参加者全員感動した

ことであろう。撫石庵コレクションには、アジア各地の梵音具を収集したもので、一つ一つの資料が重厚で圧巻であった。

ゆっくりと展示資料を観て、外に出ると、天空は青く高く、木々の緑に陽光があたりすばらしいキャンパスとなっていた。博物館の今後の発展を祈念しつつ帰路についた。

(埼玉県考古学会会長)

ヨーロッパの歴史博物館から

—とくにマインツ州立博物館から—

鍋澤幸雄



素人ながら「ケルト」に心ひかれ毎夏一ヶ月ほどドイツを拠点に諸地域の遺跡や博物館に足をのぼして数年になる。今夏出発数日前に本学博物館から本館見学感想稿の依頼が

あった。事務長いわく訪館数も多いからとのこと。断りきれず、今回訪問先の博物館めぐりならと返事した……。

数年間に比し訪館数は多くないだろうが、実にさまざまである。館の大小にもよるが通常は館内案内図があり、時代区分や地域別の展示室やケースがある。若干の概要説明や各種地図なども前後の壁面などにある。しかしこれらの概要などを読むのに字引を要する者には、それらの概要冊子のどから手が出るほどほしいものである。でもこれらがあるところは極めてまれである。それらを撮影したくても禁止のところが多い。やがて出口に向う段では若干の満足と大きな不満が残ることが多い。今夏は帰国直前の猛暑のマインツで大満足で出口に向えた博物館に出会った。その先史部門〔旧石器時代～鉄器時代〕の小冊子から「ケルト」(鉄器)時代直前の骨壺葬地時代の部を以下に試訳・紹介し、本学博物館もこの種の小冊子が入手できる博物館になることを期待する。

骨壺葬地時代(前1200～前700)

「骨壺葬地時代」とは青銅器時代から鉄器時代への移行期における文化的経緯として在る。確かに青銅は引きつづき武器や道具や装身具のために広く用いられる金属ではあるが、稀には最初の鉄製品もすでに存在する。発掘された諸財宝や貯蔵所は重要な二つのことを示唆する。攻撃的諸運動によって形成される極めて不穏な時代であること、これまで社会像をもっぱら形成していた農民たちと並んで、時折はすでに手工業者たちが、いまや商人たちも次第に盛んに現れること。

攻撃的な諸闘争が南東ヨーロッパを離れて南に向い、諸部族がいわゆるドーリス人の移動の中でギリシアを蹂躞する。さらにアジアのヒッタイト帝国が破壊され、またいわゆる海の諸部族がシリアやエジプトを脅かす。かかる諸運動が南ヨーロッパや西ヨーロッパへ広がり、骨壺葬地時代をかなり本質的に形成する。

かかる新しい文化の中で身体墓に代わって諸大骨壺に納まる火葬埋葬が現れ、副次的な諸容器や食べ物の副葬品がこの埋葬を完備させる。計画的に設けられた諸納骨墓地には、数百の埋葬を伴うかなりの規模になることもよくある。骨壺墓の青銅副葬品は比較的少ないが、発掘された多数の財宝や貯蔵所がこの時代の武器や装身具や道具など

のよき概観を与える。さまざまな種類の新しい武器や道具の貯蔵所と同時に、壊れたり使用できない物の貯蔵所もはっきり立証されるという事実は、原料の青銅がいかに高価であったかとともに、移動商人たちが単に彼らの補給物貯蔵所の設置だけでなく、「古物」を再び引き取りかつ集積したことも明示する。

ヘルメット、円形盾、柄長の槍、剣が男の武装とされ、飾りピン・腕輪、最初がここ当地の「真の」フィブラ留め金が女の服装に付き物となる。いわゆるラップ人の縦斧・柄っほ付縦斧、馬具の一部や三日月形鎌が、一番良く発見される道具である。

青銅器時代の単純な陶器に対して今や多数の良く成形された容器が見られ、一部はすでにゆっく

り回るろくろ台で作られる。装飾文様は大抵幾何学的でかつ一部に白色象眼。

この時代の定住形態は村であろうが、これについてはマインツ地域ではまだ体系的発掘がなされていない。さらにこの時代の人々は防備を固めた最初の並列家屋定住、いわゆる「環状防壁」を建立した。とくにこの時代末期から発掘される多数の財宝は、鉄器時代への決定的移行もまた実効のある攻撃的闘争を伴うものであったことを示唆する。幾重にもみえる「環状防壁」の再建がそのことを示唆する。

以上が骨壺葬地時代の概説であるが、前後にこの時代の文化史的関連地図と展示ケース番号ごとの内容の説明があるが省略

(立正大学法学部教授)

大学の博物館

桐原 健



信州・松本のカルチャーグループ「あがたの森古代学同好会」は年に1回、研修遠足を行っておりまして、本年は武蔵国、埼玉県ということになり、栗原文蔵さんにお願

いして見学コースを作っていただきました。

コースの中に立正大学博物館があって、称名寺貝塚の一括資料、釈迦誕生のカピラ城の出土遺物、それに梵鐘の優品がたくさんある。坂詰さんが館長で私も出講しているのです。土・日でも見学できるという有難い添書がありました。

見学1ヶ月後に館長さんより本館見学の感想を述べよとのお便りをいただき、書ける能力など無く、お断りすべきだったのに承諾のお返事を出してしまいました。出すについてはそれなりの理由がある。

37年前、信濃国分寺の第2次調査の折に4日間だけ見学気分で参加しました。帰る段になって調査主任の坂詰さんに挨拶したところ、「ご苦勞様でした。では担当地区のレポートをいただきましょう」。大慌てに慌てて一列車遅らせてほうほうの体で退出した。あのときの記憶がほろ苦く蘇って

きたのです。「見学させていただいた以上は、どうも」という次第です。

私の感慨は、若い研究者に学の伝統を伝えていくのは大学の(考古)博物館であるという一言に尽きます。

日考協の17回総会が立正大で開催されたのは昭和31年。その時にいただいた絵葉書が「埼玉県石神貝塚」で、木鬼土偶や耳飾りの現物が今ここにある。38年に長野県北佐久郡北御牧村で行った御牧の上窯や中八重原窯の資料が並んでいる。ネパールの仏跡調査ですが、まだ海外調査の少なかった当時、立正大の快挙として宣伝されたものでした。それに吉田格先生の称名寺貝塚の一括資料。開館1周年ということですが、ここには立正考古学70余年の研究が蓄積されている。

私自身の小さな体験ですが、研究の原点、より掘の一つは母校の考古学資料室にあると思っています。その部屋に入ると学に志した頃に立ち戻れる。時には安らぎが、時には活力が与えられます。大学の博物館には学の伝統に基づく力がある。

貴学・貴館の御発展をお祈り申し上げます。

(長野県考古学会会長)

展示資料の背景 (2)

縄文時代の資料

坂詰秀一

(1) 東京都居木橋貝塚

居木橋貝塚は、東京都品川区大崎、本学大崎キャンパスの至近地に存在し、縄文時代前期の小貝塚群より形成されている。古くから知られていた本貝塚は、1940年代に小発掘が試みられたが、その全容は明らかではなかった。そこで昭和28(1953)年の夏から秋にかけて分布図の作成とともにC地点の小貝塚を発掘した。この発掘は、当時、立正高校3年生であった私の卒業記念の発掘?であった。指導を久保常晴先生(当時、立正大学助教授)にお願いし約40日間かけて、縄文前期の諸磯B式期の竪穴住居跡を完掘した。その調査時に出土した遺物のなかに有脚仕切り付の土器があった。この珍資料は、石田茂作先生のご紹介によって八幡一郎先生の鑑定、そして松原正業氏によって復原がなされた。その頃「珍資料」として縄文土器の研究者間で話題になった。時期は前期(諸磯B式)と判断したが、竪穴の覆土中から後期(堀之内式)の土器の出土もあり問題が残されている。また、鯨骨製の「剣状骨角器」も出土した。鑑定された金子浩昌氏は「珍品」と判定して下さった。この二つの遺物によって、居木橋貝塚は学界に周知されることになった。報告は「居木橋貝塚の発掘」(『立正大学学園新聞』6、昭28.9)及び「古代の品川」(昭38.3)に発表した。

(2) 千葉県築地台貝塚

築地台貝塚は、千葉県千葉市築地台に存在する縄文時代中～後期の貝塚である。本貝塚の発掘は、昭和24(1949)年と同25(1950)年の2次にわたって実施された。発掘の主催は立正大学史学会、指導は久保常晴先生であった。当時、多くの大学では、太平洋戦争の終結によって新しい歴史学の研究が叫ばれ、その一環として貝塚などの発掘実習が盛んになされていた。そこで丸子巨先生(当時、立正大学助手)が中心となり史学科生の発掘実習を築地台貝塚に求め、多くの学科生の参加のもとに行

われた(と伝聞)。その結果、貝層中から縄文後期の堀之内式期の甕棺が出土したほか、多数の中～後期土器が検出された。報告は、久保先生が『日本考古学年報』2.3に執筆されている。

(3) 埼玉県石神貝塚

石神貝塚は、埼玉県川口市に存在する縄文時代後～晩期の貝塚である。この貝塚は、安行猿貝貝塚とともに縄文時代の安行式を出土する貝塚として古くから学界に知られていた。昭和29(1954)年から30(1955)年にかけて立正大学考古学会がB貝塚を発掘した。この発掘は、濱田文護氏(当時、学部3年生)の肝入りによって実施されたもので、2ヶ年にわたる発掘調査によって、多量の縄文後～晩期の土器と土製品(土偶・土版・耳飾りなど)・骨角製品(腕輪・釣り針など)・石製品(石斧・石皿ほか)などのほか、人骨も出土し、考古学界の注目を浴びた。出土土器を観察するため、山内清男氏をはじめ江坂輝弥・芹澤長介・西村正衛・野口義磨氏などが本学を訪れたのは発掘直後のことであった。土器のほか、完形に近いミミヅク土偶、耳栓(約70点)、波状縁の貝輪などが注目された。報告は、概要を『日本考古学年報』7・8と『銅鐸』10・11に発表した。なお、発掘中、渡邊直経氏(東京大学人類学教室)が採取された熱残留磁気資料が年代測定資料として活用されたことも広く知られている。

(4) 神奈川県狩野遺跡

狩野遺跡は、神奈川県南足柄市狩野に存在する縄文時代中期の配石遺跡である。昭和33(1958)年に立会い調査の後、発掘した遺跡である。配石遺構を中心に小石組遺構を伴うもので、縄文中期の阿玉台式土器を出土することが確認された。遺構中に大石皿があり、付近に小石皿が散在し、特異な状況が把握された。報告は「神奈川県狩野配石遺跡」(『立正大学文学部論叢』15、昭37.6)と題して執筆した。縄文時代の配石遺構については、小形山遺跡(山梨県都留市)で晩期、敷石遺構については、五明遺跡(埼玉県玉川村)で後期の例を発掘し、出土遺物も一部保管されている。

(本館館長・文学部教授)

来館者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様のご意向を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で選択させて頂いたものです。貴重なご意見、ありがとうございます。今後の博物館運営に役立たせていただきます。

・ティラウラコット発掘の資料や、当時使用した調査機材の展示が特に面白かったです。我が大学も、素晴らしい研究を残していることを、改めて認識しました。

(県内・本学生・21歳男性)

・今日初めて立正の博物館に来ましたが、ただ感心するばかりでした。とても歴史を感じました。今はまだ勉強不足なため、ただただ見ていて感心するばかりでしたが、これから色々な事を学び、また足を運ぼうと思いました。

(県内・他大学生・19歳女性)

・博物館をみせてもらいましたが、すばらしかった。こんなに大学に資料があるとは、思いませんでした。展示しているものが、考古学が中心であり、できれば他の資料も展示してあればいいなあと思いました。

(県内・本学生・20歳男性)

・始めて博物館を見に来ました。あまりの資料にびっくりしました。でも、入り口付近から風が入って、少し寒かったです。安全面もあると思います。入り口を少し、考えたらいかがでしょうか。

(県内・本学生・19歳男性)

・卒論の関係で、資料を見学に来ました。考古学の資料が充実していて、とてもすばらしかったです。また、学芸員・事務員の方にもとってもよくしてもらいました。本当に、ありがとうございます。

(県外・他大学生・22歳女性)

・塔心礎の模型をみましたが、説明によれば私達と同じ学生が作ったとのこと、びっくりしました。私達も作りたいなと思いました。

(県内・本学生・20歳女性)

・職業がら、この塔心礎の特別展をみにきました。めったに見られない心礎が写真で多くみられ、楽しませてもらいました。

(県内・一般・50代男性)

・立正大学が、こんなに窯を発掘しているとは知りませんでした。勉強になりました。博物館をもう少し、アピールしたらどうでしょうか。

(県内・本学生・20歳男性)

利用案内

所在地：〒360-0161

埼玉県熊谷市万吉1700

立正大学キャンパス内

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

開館日：月・水・木・金・土曜日

(大学休業中を除く)

開館時間：10:00~16:00

*火・土・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)に開館を希望する人は、事前に博物館

あるいは総務部総務課(048-536-6010)にご連絡ください。

交通機関：JR高崎線(上野から55分)、上越・長野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際バス)で約10分。東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

あとがき

今年は、企画展・特別展と日々その準備に追われる毎日であった。力不足ではあるが、今後とも年2回の展覧会を維持できるよう頑張っていきたい。最後に、「万吉だより」第2号の刊行が遅れたことを、お詫びしたい。(上野)

題字揮毫 田淵 観 斎 氏 (立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第2号

平成15(2003)年12月31日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

Email: museum@ris.ac.jp

http://www.ris.ac.jp/museum/